

Title	戦後パラグアイ移民の現状 学齢期子ども移民の生きた道
Author(s)	高橋, 勝幸
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81419
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

戦後パラグアイ移民の現状 学齡期子ども移民の生きた道

元南山宗教文化研究所

高橋勝幸

1. はじめに

①移民とは何だったのか？

「移民」とは何だったのか、筆者は、子ども移民として開拓地で成人するまで暮らして来たにも拘わらず、その答えが見付からない。また、「移民」という語も忘れられようとしている。旧満州（中国東北部）からの引揚者も存命者は90歳代後半以上になっていて、直接話を聞くことも出来なくなっている。大部分の方が、語りたくない・思い出したくもない、と言うものであった。更に、その責任を問うても、「日本では口にしてはいけない」と引揚者であることを知られたくないと言うものであった。また、戦後のブラジル移民でも、移住者は既に開かれた先住者の農場に雇われて行くもので、実際に原始林の伐採・開拓に従事した人は戦前の移住者だけであり、今日の日系人として日本に働きに来て居る人では、アマゾン開拓者が原始林と格闘したくらいでほとんどの人は開拓の意味も知らない。「開拓の苦勞はおじいちゃんから聞いた」話でしかない。

筆者の、その稀少な学齡期に子ども移民として家族に連れられてパラグアイの人類未踏の原始林の中の開拓移住地に入植した経験からの話であり、始めて聞く人も多いと思う。一人の子ども移民が原始林の中で公共施設の一切ない中で生きて来た人生を語るもので、始めて聞く者にとっては未知の世界であり想像の出来ないものであろう。

過日、神戸元町の「移住資料館」内の「日伯協会」（日本とブラジル友好協会）の資料室で、1957年11月19日出航の移民船ルイス号の乗船者写真を打ち出して貰った。300人以上の乗船者であるが、大半はブラジルであるので、パラグアイ関係者に絞ってのものをお願いした。懐かしい同船者の写真であったが、その中の存命者は2名だけであった。

一人一人の痕跡を辿ると涙が止まらなくなってくる。その苦勞は筆舌に尽し難いものがあった。故郷日本を夢に見ながら、再び祖国を見ることなく現地の土となった方達の無念

の姿が脳裏をかすめてくる。勿論、自分の親・兄弟姉妹も同じである。現地で生まれた子ども達の時代になっているが、不思議と唱歌「ふるさと」は2世・3世になっても涙を流して歌っていた。親の涙・祖国への憧れは世代を超えて子や孫の心に残っていることを教えられる。

さて、一人の人生を語るだけなら「大変でしたね」で終りである。ここでは政治的・哲学的な問題も取り上げたい。日本国憲法第26条に「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」とある。子ども移民であっても「日本国籍」を有することには変りはないはずであるが、一步（移民として）国外に出た者は返り見られることなく「棄てられた民」であった。戦後日本の貧しい時代ではあったが、一番の犠牲になるのが子どもであり、立場の弱い者であった。幸いに私は学校には行けなくとも、「辞書」を引くことが出来たことで、日本語を覚えることが出来た。書物に触れることが出来るということは日本文化にも触れることになる。大人達の言っていることの意味がおぼろげながらも理解出来た。

ところが、1990年入管法改正以来、現在も大勢の日系人労働者が子どもを連れて日本に働きに来ているが、祖父・祖祖父の時代の過ちを繰り返している。言葉の身に付かない子ども、日本の学校に馴染めない子どもが大半を占めている。また、南米に帰るとなるとどちらの言語も身に付かないで生涯を終える子どもが大勢出てくる。この過ちは繰り返して欲しくない、私どもだけで終りにして欲しかった。

また、今日のコロナ禍で問題が顕在化して来ているが、国を、大陸を超えて移動するには伝染病は付き物である。頑丈な体で元気なはずの日系人労働者が簡単に結核に感染して咯血した時、予防接種のない国からの来日では防ぎようがなかった。同じ職場の日本人の保菌者は発病していないことを考えると、人々の移動が激しくなれば、避けられない問題になってくる。現地では、デング熱、風土病（マラリア系）のために異常に年を取り亡くなる人も多かった。60歳代での死因が「老衰」と言われて、驚かないで居られるだろうか。

②次に「哲学的」な角度から「移民」の問題を取り上げたい。

「日本移民学会」があるが、移住経験者が居ないので来て欲しいと呼ばれたが、「移民」を標語とする学会なのに、移住経験をしてきた者には全く馴染めなかった。その原因が分らないままであったが、現地の日本人会事務局長から「あいつらは何しに来ているんだ」と協

力隊員のことを聞かれた時には答えが出て来なかった。地元で各移住地の方々が集まって「盆踊り大会」を催す時、協力隊員は日本語学校が夏休みのため旅行に出かけて一人も居なかった。確かに、「盆踊り大会」は、広く日本人移住地全体の集りであり、猫の手も借りたい忙しさであることは間違いないが、協力隊員にはその認識はなかった。

上長の許可を貰い、日本語学校は休暇中の旅行であり「就業規則」の条文には何等触れるものはない。現地の日本語学校に派遣され、日本人移住者との触れ合いも多いのではないかと思うが、休暇中は殆ど不在とのことであった。こころは観光で移住地に見えてくる。

この協力隊員の行動を移住者の「こころ」に置き換えて考えて見よう。

日本を遠く離れ、日本語・日本人に触れ合いたい気持ちが一杯の移住地の方々にとっては、直接日本から来た人の声を聞きたいことは当然であるが、日本語学校で孫たちが学んでいる以上には触れ合うことがない。休みには旅行で留守でしかないので会う術がない。

この移住地の方から協力隊員に対する不満の声は、話しをしたくても直接に話が聞けないことであった。テレビが普及しても、故国日本から来た者に直接会いたい気持ちは年を取るほどに強くなるようである。この意味するところは、内側から見るか、外側から見るかで判断が逆になることであった。そのことが意識の違いとなって出てくるようであった。

即ち、軸足は日本にあり、外側から現地を見る協力隊員の立場と、移住地に暮らす日本人移住者のこころの内側から見る立場では、大きなギャップがあることが見て取れる。ところが、日本移民学会に行くとその現地の報告を聞かされるが、移住者のこころの声を代弁するものではなく、「移住者」のこころから出る話ではない訳なので学会で馴染めるはずはなかった。

即ち、お役所的に客観的に上から目線で移住者を外側から見ている訳で、移住者の「こころとともにある」ものではない。言葉は対岸の火事の表現であり、客観的に学問的であっても、移住者とともにある、ものではない。同じ言葉でも「こころ」がないことには外から見る冷たいものでしかないことに気付かされる。「こころ」がないことは即ち「哲学」がないことであり、同じ言葉でも外から見るか内から見るかで意味は全く違ったものになってくる。我がことではなく、立場上の外側から見るお役人の使う言葉は事務的であり、その言葉に馴染める市民が居るだろうか。これと同じことを問われていたことになる。

この論理（意識）の違いに気付くことには随分と時間が掛ったが、将に東西思想の対立の

狭間の中で彷徨っていた自分に気付く良い機会になった。同じ言葉なのに「こころ」に響いてくるものが違ってくることを現地の人から教えられた。

御承知のように欧米の論理的な科学思想の行き詰まりを称える著作は多くなっている。今日の地球規模の諸問題に対処出来なくなっていることは自明のこととなっている。欧米の科学思想の行き詰まりは「こころ」を忘れた論理中心の思考にあるようである。この解決の道が、日本の文化・日本人が古来はぐくんできた内なる「こころ」から見ると、その人の身になって考える世界が大切になってくる。冷たい論理・法に触れなければ「良し」とする世界ではなく、人々の「こころ」の中で「一つ」になる世界哲学が必要となって来ている。

この「移民」の語の問題も、欧米的な論理で見ると、官僚的な上から目線で冷たいものでしかない。それは、西欧の思想を優位と見る限り、非西洋地域に西洋の文化・宗教・道徳・生活習慣・言語までもが押し付けられてきた。それはまた、非西洋地域を西洋に追随させ、植民地支配までも正当化する動きを生み出した。それを「良し」とされるなら馴染めるはずはない。しかし、移住者と「ともにあるこころ」から見ると「移民」の語が我がことのように感じ取れる。

今日の日本に、日本人に、失われつつある「こころ」を「移民」の問題から、同じ日本人が苦難の道を歩んだことを知る機会になると思う。「移民」の問題を外から見るとはなく、こころの内から我がこととして見るなら、また違った感じ方が出来ると思うので、そうした眼差しを養って頂ければ幸いである。

2. 自分の人生を振り返って

(a) 生まれ故郷愛媛県今治市（旧富田村）東村でのこと

昭和 20 年 (1945)、今治大空襲の時にこの世に生を受けた。ご近所の方などは松山空襲で家を焼かれ、故郷の東村に疎開してきて今治大空襲に遭って 2 人の子供を失っている。僅か 60 戸に満たない東村から 50 数名の空襲犠牲者が出ている。村の真言宗真光寺の延命地蔵尊脇に犠牲者の名前が刻まれた慰霊塔がある。

親や古老の話から、焼夷弾が雨のように降ってくる中を村人達は火災から逃れようと 1

キロ程離れた山の中に逃げ込んだ。我が家はと言うと、まだ小学校に上がったばかりの長兄が教科書をなくし、探しているうちに逃げ遅れた。富田川の土手の松の大木の下まで行って、昼間のような照明弾に照らされるため白砂の河原を渡れなかったと言う。ところがB29爆撃機と戦闘機は大勢の人が山に逃げるのを見ていて、1トン爆弾を山中に集中して落としたがための多くの犠牲者となった。富田川の土手の松の大木が母親に抱かれて九死に一生を得た場所であった。松枯れのため、この大木は今はない。

戦後の食糧難では農村のお蔭で食べ物には不自由がなかったが、役場から係員が来て田圃の坪刈りをして供出米の数量を決めて行く。稲が盗まれても供出量は変わらず農家にとっては厳しいものであった。稲だけでなく、麦もジャガイモ等も農作物は厳しく供出させられていた。「貧乏人は麦飯を食え」の時代だけに、裸麦の収穫も合せての供出で、弁当も「麦」を混ぜねば怒られる時代であった。時代が時代だけに闇米屋が横行した。現金収入の少ない農家にとっては、闇米屋は有り難い存在であったであろうが、闇米屋に売った不足分は小米や青米、麦・芋等で補う訳で決して豊かではなかった。現代では、この小米は豚も食べないと言う。都会の人はまずい配給米に閉口して闇米を買う人の多い時代でもあった。

特に終戦の年は、凶作の上に肥料不足、労働力不足で食糧難に拍車を掛けていた。佐賀県白石町は水田の広がる農村地帯であるが、この地元の神社に闇米を断り配給米だけで餓死した山口良忠判事の顕彰碑があった。「腹八分」が合言葉の時代では配給だけでは餓死者が出る時代であった。世界有数の悪路で川のジャリ石を敷いた道路ではガタガタで自転車も転んだ。生活環境の酷さだけでなく食糧難・就職難の時代でもあった。農地改革、民法改正でやって行けなくなった農家の2・3男は海外に活路を求めようになってくる。

この同じ富田村の松木地区が無教会派キリスト教の矢内原忠雄の出身地でもあった。隣の家のお母さんが矢内原家の出身で、「キリスト教」と言う言葉はよく耳にしていた。キリスト教との接点は幼少の頃からあった。

(b) 南アメリカ・パラグアイ移民の子として

昭和27年(1952)、サンフランシスコ講和条約が結ばれ日本との戦争状態が集結すると、ドミニカを含めて南米各国との移住協定が結ばれ、戦後移民が再開されるようになる。旧満州や南方からの引揚者等も狭い日本では厄介者で、土地のない農家の2・3男も生活の場を南米の新天地に求めていた。神戸港からは毎月移民船が出航する。ブラジル丸、サント

ス丸、後にアルゼンチナ丸が中心であったが、船が足りずオランダのローヤル船（西周り）も参入した。私共家族はオランダ船ルイス号に乗船した。彼ら移住者の「譲るころ」が貧しい日本を助け、高度成長の礎えとなっているが、ほとんど忘れられた存在者であろう。

まるで出征兵士のように「バンザイ・バンザイ」に見送られて村を後にしたこと、神戸の移住斡旋所のことや2ヵ月間の移民船内の生活については紙面の都合で省略する。

私の父親も、農家の2・3男の典型で、戦前からブラジル移民を考えていたようで、戦後移民が再開されると、松山の愛媛県庁を訪れ可能性を聞いていたようであった。県の方針なのか「ブラジルは雇用移民」だとして「自営開拓民」を薦めていた。始めは無償で土地が与えられるドミニカ移民を薦めていた。しかし、家も土地も売却し渡航の荷造りをしているところに愛媛県庁の職員がやってきて「ドミニカは共産革命が起ったので移民中止となった」旨の通知であった。家も土地もないので後戻りも出来ず、急遽「同じ自営開拓民を受け入れているパラグアイに」と県庁の薦めるままに行くことになった。

昭和32年（1957）11月、神戸出航。まだ中学一年生であった私は親のいわれるままに見知らぬ国へ旅立った。不安の中にも希望に胸ふくらませていたが、現実は一筋もなかった。

ブエノス・アイレスから板の椅子だけの国際列車で2日掛かりでパラグアイのエンカルナシオン市に着いた。パラグアイ国イタプア県にあるフラム移住地サンタ・ロサ地区に移植するも、エンカルナシオン市からトラックに分乗し、雨の中、ぬかるむ道を二日もかかってサンタ・ロサの草原に辿り着いた。そのため入国第一夜はドイツ人移住地に近いフェススの町の売店の土間でシートを敷いて、しかもランプのもとで過ごした。このフェススの町の遺跡が、16・17世紀のイエズス会王国の本部跡であることは、日本に帰国してから教えられた。

この時代のイエズス会のリダクシオンの方針が、キリシタン時代の日本の「適応主義」布教方針と類似していた事が筆者の「比較思想」研究の基礎となっている。二十一世紀は「宗教間対話」の時代であり、このパラグアイでの体験が大きく役立っている。

サンタ・ロサのカンポ（草原）には大きな倉庫が1戸建てられていた。ここが移住者の収容所ということであったが、水は百米程離れた川まで汲みに行かねばならず、薪も山に取りに行く、文字通りのキャンプ生活となった。この倉庫も1ヵ月後には次に来る移住者に譲り、テント暮らしとなる。このフラム移住地は、ドミニカ移民中止で急な移住者受け入れが始まり、まだ測量もして居らず、道路も木を切っただけであった。何の準備もしてお

らず移民を入れたので、史上最悪の移住地となった。公共の設備は一切なかった。学校も大分遅れて移住者によって掘っ立て小屋のような建物を作り、移住者の中の元（日本の）高校生くらいの者を教師にしていた。従って、読み・書き・そろばんの寺子屋レベルのものであった。それでも働ける子どもは重要な稼働力であり、学校には出られなかった。

土地とは言っても日本のような開かれた畑ではない。人類未踏の肥沃な原始林の喬木地帯でこれを切り開いて畑にしない限り作物は作れない。生きるためだけに命懸けでこの原始林の伐採から挑むことになる。半年程の間に移住者はそれぞれに決められたロッテ（土地）に仮小屋を建てて移り住んで行った。その間の原始林を畑にするまでの作業は、伐採、枝打ち、山焼き、寄せ焼き、種播きと炎天下の中で、風土病、ブヨの大群、吸血バエと戦い、昼夜を問わず続けられた。

テント生活の間は日本各地からの集まりで、話題も豊富なので楽しい一時を過ごせたが、それぞれに自分のロッテに移り住んでいってしまうと、広い大地に一軒だけがポツリと残る寂しい生活が始まった。それからは雨降りなどで仕事ができない時には、自然とどこからともなく人々が集まって来た。話題は、日本各地はもちろんのこと、旧満州から中国、南方、ハワイ、アメリカへと尽きることはなかった。

入植して半年程経った頃、高知県大正町出身者たちが学校を建てた。学校と言っても掘っ立て柱に屋根と板壁を下半分に張っただけの土間のままで粗末な吹き曝しのものではあったが、久しく離れていた学校に入れるようになり仲間も出来、楽しい一時を過ごした。やがてパラグアイ人女教師がアスンシオンから赴任してきて、充実した学校生活にはなった。内容は小学校低学年程度であったが、スペイン語を知らない者にとっては有り難かった。

しかし、学校に入っても開拓当初の1日でも早く収穫を揚げなければ生活そのものが成り立たないので、家族の苦しい現状を見ると家の手伝いをせざるを得なくなり、学校を辞める者も増えていった。その頃、遠い日本の同級生達はすでに高校生になっていたのだ。そんな中で、ますます取り残されて行く自分にどうすることも出来ない人生の苦しみを味わわされていた。

日本国憲法第26条に国民の基本的権利の一つとして「教育を受ける権利」があるが、移民の子どもには適用されていない。移住者となっても日本国籍を失う訳ではないが、「移民は棄民」と言われるように国外に出た者には何の方策もなく、放ったらかしにされた事実が残る。学業の機会のないままで、生涯を送る子どもの移民1世は数多い。現在、日本に

働きに来ている学齢期の移民 1 世のことを静岡大学元教授の前山隆氏は「親に拉致された子ども」と表現する。国籍はもちろん「日本」であり、顔も姿も日本人でありながら漢字が読めない大の大人である。日本の駅で漢字が読めず、切符を買うことが出来ない年配者に逢った時、移住行政の犠牲者の姿が見えてくる。

開拓当初は、身体が不調で苦しくとも我慢して話さないし、家族が病気でも医者に見せる余裕がなく手遅れになることが多かった。また母親のお乳が出ないために死んでいく赤子も少なくなかった。生きて欲しいと願っても、人間の無力さに悔しい思いをさせられていた。こんな時、自分だけ勉強したい、学校に行きたいなどと言えよう筈もなかった。

ただ黙々と働きながら、何かを求めていた。やりたいことができない焦燥感に駆られていた。独学で学ばない限り何も身に付かなかった。雨や風の強い日で仕事ができない時や、夜遅くランプの下で焦りにも似て学んでいた。誰もが疲れ果てていて、仕事のできない日は死んだようになって寝ていて、他の者に気を配る余裕などなかった。

同じような境遇の若者に会うたびに、それぞれ自分の夢・希望を語るのだが、実現には程遠く皆空しいものばかりであった。ある若者は自暴自棄に陥りどこかに流れていってしまった。自殺した者もいた。ある若者は開拓地を諦めて町に出て勤めるようになった。数年経つと、移住地も畑からの収穫と家畜によって潤い、開拓当初の苦しい状態から脱して安定しつつあったが、自分が失った時間はもはや返っては来なかった。

若者たちは一層焦りを深め、移住地内の古い教科書を片っ端から借りてきては勉強していた。失った空白の時間を取り戻そうと躍起になっていたのだ。しかし、働けど働けど雑草の勢いは激しい。炎天下、絶望に近い中で毎日黙々と働き続けた。生活面では多少の預金ができたとしても、寄宿舎では金も掛り、労働力を失うので、学校に行かせて貰うほどのゆとりはない。年齢が進み、学校（勉学）への夢はますます断たれて行った。

(c) ヨセフ・バルテル神父との出会い

大木の切株だらけで各所に水溜りもあるデコボコ道で、晴れるとテラシャーの赤土の砂ボコリ、雨が降るとぬかるみスリップする悪路を四輪駆動でウィンチ付きの米軍払い下げのジープで轟音を上げて不定期だが移住地にやってくるドイツ人ヨセフ・バルテル神父（神言会）がいた。日本から視察と称してパラグアイに来る議員さんが多数いるが、都市部だけで砂ボコリの凄まじいデコボコ道を移住地まで足を運ぶ者は稀であるので、この直

ぐ怒り出す老神父には何かしら親しみを覚え心強かった。

バルテル神父は子ども達の味方でもあった。少額でドイツ人移住地内にある学校の寄宿舎に入れる道を開いていた。親を説得して何とか入学できるように尽力して、何人かはその恩恵に浴していた。しかし、子どもとは言え重要な労働力である。家の稼働力を失いたくない親たちは拒否していた。親にすれば1日でも早く安定した生活を求めている。重要な労働力の子どもを手放さず、その人生は閉ざされる。子どもは奴隷と同じ状態であった。

このバルテル神父は、戦中・戦後の20年間、長崎県大村市の教会の主任司祭であったそう。世界で最も貧しい国に行くことを希望してパラグアイに来たと言う。大村市の野岳湖キャンプ場に一泊した際の管理人が大村教会出身者だったのでバルテル神父の事を尋ねたら、「子どもの頃よく怒られました」と懐かしんで遅くまで話し込んで行かれた。

キリスト教の何たるかは解らなくとも、子どもたちのために親と大声で言い争い、命懸けで働いている老神父の姿だけは眼に焼き付いている。本も辞書もほとんど手に入らず、字も読めない中で、聖書だけがカナを打ってくれている唯一の書籍であった。書き順はでたらめでも、漢字を覚えるために下手な字でも書き写していた。神父の話すこと、説教もすべてうる覚えでも知っていて、聖書と矛盾しないことでキリスト教は自分に近いものになっていた。

他には、ジャングルの奥地で町の教会まで数十キロ離れている原住民の村々を歩いて回るパードレ・ミシオネーロ(Padre Misionero)と呼ばれる二人一組の若い神父たちがいた。ジャングルの中の道はサウナのように風が通らない。大草原に出ても一匹二匹のガラガラ蛇には必ずと言っていいくらいに出会う。奥地の村には5・6年前に捕ったワニの皮が干してあった。野生の豹もいて夜は絶対に歩けない所であった。こんな奥まった所まで、足を踏み入れてくる根性には度肝を抜かれる。宗教は眼に見えない世界のことで、理屈で分るものではない。ただ命懸けで働く者の姿から絶対者の存在があると確信するだけであった。何かは知らないけれど、命を懸けられるものが、この世界にあることだけは教えられていたと思う。今日の日本の教会で、言葉を越えた「気迫」、移住者(被曝者、引揚者)など貧しい、苦しみのドン底にある人にこころから「寄り添う」キリストの姿を見ることはない。それは、はじめに見たが、「移民」の語と同じで、外から「客観的に見る」立場では、「こころ」の内から見るものではなく、馴染めるものではないことと同じである。

(d) 寺田慎一先生との出会い

寺田慎一先生は、北海道大学を出て旧満州の農事試験場で副場長を勤め、戦後は秋田県立農事試験場長。定年後（55歳）に海外協会連合会（現 JICA の前身）からパラグアイのアルト・パラナに派遣されて来た。移住地に農事試験場を開設することが目的であったようである。

開拓地で若者が苦しい状況にあったとき、アルト・パラナ農業講習所が開かれると聞いた。多くの若者が応募しようと思ったが、定員は15名ということで諦める者も数多くいた。次年度以降に回される者、年齢的に無理な者など、それぞれに事情はあった。それでも講習所への応募者は定員の2倍になった。サンタ・ロサにも寺田先生は出向いて来られて面接をして行った。幸いに私は第一期生として入所することができた。

アルト・パラナ農業講習所の精神は、まさに寺田場長の母校である北海道大学の精神でもあった。「青年よ、大志を抱け」と言ったクラーク博士の言葉の通り、寺田所長は「大きく学び、大きく働き、そして大きな仕事をしよう」、「的はただ一つである。その的に向かって奮進しよう」、「一人一人の力は小さい、しかしみなぎ協力し、団結して取り組むなら二倍、三倍、十倍、百倍の仕事ができる」など、つねに夢と希望を与え、やる気を起こさせる訓話を中心であった。

また、講習生は皆やる気満々であり、休憩時間、放課後、休日に関係なく、質問、議論を繰り返した。講習所内の仕事、特に薪割り、炊事、風呂場などの手伝いも積極的にやっていた。これほどに意義のある充実した時間をすごしたことは、その後の人生において一度もない。アルト・パラナ農業講習所の功績、その意義は実に深いものであったと断言できる。

70日間の講習所生活を終え、学ぶ喜びと面白さを知った者、人生の目的をしっかりと把握した者は、講習所時のノートをくり返し読み、専門書を借りてきては書き写し、議論するという具合で、学ぶ意欲は衰えを知らなかった。夜明けまで本に読みふけることもしばしばであった。移住地で手に入れる本にはことごとく目を通し、広告にいたるまで知っているほどであった。

アルト・パラナ農業講習所。そこには「大望を抱く人生」を、身をもって示して下さった

寺田慎一先生、講習所の事務一切を担当し、教鞭をとった世話役で、しかも自費で講習生全員をアルゼンチン国ミッショネス州まで修学旅行に連れて行って下さった小菅伊之彦先生、フラム農場からやってきては熱中し、話し出したら止まらなく土生幹夫先生、寺田先生帰国後講習所を引き継がれた宮川清忠先生、その他ピラポ事業所から教えに来られた先生方、圃場実習を担当して下さった松田さん、馬屋原さん、食事を準備して下さった今は亡き岩手県出身の高橋のおばさん、マドンナ的存在のピラポ診療所の方々、それとやる気満々の講習所仲間たちがいた。自分の人生において、後にも先にも、これほど充実した時はなかった、と今改めて思い返す。恵まれた環境の日本ではこれ程必死になってやる必要もないので理解出来ないであろう。気楽に生温くやっていたは身に付かないが、パラグアイのそれは違っていた。

寺田慎一先生は、何故か私を個人的に呼ばれて「試験場で助手として働いて見ないか」と要請された。講習生の何人かは将来試験場で働けるものと野心を持っていたが、その誰にも声をかけず、一番消極的だった者を選ばれた。このことが私の人生を大きく変えることになる。寺田先生は、一部屋の壁面一杯の本のすべてを「自由に読んで良い」と言われた。活字に飢えていた者にとっては夢のような話であった。寺田先生との出会いが、学問に憧れるようになり、やがて日本に帰国留学を決意するようになる。

寺田先生出身の北海道大学農学部の試験圃場を歩いて回り、ラベルの位置がアルト・パラナ農事試験場と同じであったことに親しみを覚え、今は亡き寺田先生を懐かしく思い出した。この寺田先生との出会いが日本の大学への夢を膨らませた。この時期の勉学の甲斐があってこそ、私は後年日本に留学し、難関と言われた大学に合格することができた。私自身にとっても信じられないことだったが、講習所で教えられた「やればできる」ことを、身を以って実践できた。この挑戦の気持ちは今も変わらない。

3. 日本帰国を決意して

(a) ブエノス・アイレス市で

パラグアイのエンカルナシオン市の駅が親・兄弟と今生の別れとなる。板敷の国際列車で56時間、ブエノス・アイレス市の駅に着いた。両親が沖縄出身の日系2世リカルド・ハ

エさんのクリーニング店でお世話になった。乗船予定だった日本船「さくら丸」は料金が高すぎて乗れない。地元の宮本旅行事務所のおばさんは安く日本に行ける貨客船オランダ船ルイス号を薦めた。奇しくも移住時と同じ船になった。勿論のこと手持ちのお金では足りなかった筈だが、かつて「船で働きながら日本に行けないか」と問い合わせたことがあったよしみからか、船の切符はお情けで発行してもらえた。船旅はハエさんからの餞別だけが小遣いなので、下りる港ではすべて丘の上まで歩くだけだった。

ブエノス・アイレスでの最高の収穫は、パラグアイ出身者の「土地なし農民：Campesino sin tierra」が20万人も暮らすスラム街を訪れたことであろう。現ローマ教皇フランシスコもブエノス・アイレス大司教時代に、公共交通機関を使って訪れていたことはよく知られている。

他には、ルハン市の花栽培農家に働く講習所の後輩を訪ねた時、手紙の宛名書きが私書箱のため郵便局に行ったが分らないと言う。しばらく呆然としていたところ、日本語の解らない日系2世の青年が日本人の所を知っていると案内してくれた。そこは探している人物の花農家ではなかったが、パラグアイのサンタ・ロサ移住地からブエノス・アイレスに出て来た者が頼る農家であった。

サンタ・ロサで、近所で暮らしていた者もいたし、北海道出身の（当時は）坊やだった青年もいた。この青年は、生まれたばかりの妹にお母さんのお乳が出ないので、毎朝トボトボと馬で牛乳を取りに来ていた。お陰で雨が降っても、寒い朝でも起きて牛の乳搾りを休めなかった。サンタ・ロサで10数町歩の草原を持っている農家はなく、牛を飼っていたのは我が家だけなので、この赤ん坊はその牛乳がいのちの綱だった。しかし、この寡黙になった青年はうつむいたままで何も語らなかった。家族がバラバラになってブエノス・アイレスで、一人で人夫として働いている姿に声も出なかった。せめて赤ん坊が無事に育ったのかだけでも聞きたかったが、人生の悲哀を感じている者には思い出したくもないものがある。

この日本人の所で探していた後輩の勤め先が解り、訪ねることが出来た。

(b) 富士短期大学（現東京富士大学）のこと

無一文で日本に帰国しても、全く行く当てもなかった。辛うじて寮のある自動車の下請け会社に就職した。四当五落、一浪が当り前と言われる受検地獄の時代であったが、富

士短期大学の情報を得て手続きを取った。中学も高校も出ていないが、18歳から受験可能な「(私立大学がやっている) 大学入学資格検定試験」から受けて、なんとかこの富士短大に受け入れて頂けた。

戦後の混乱期に早稲田大学政治経済学部の大学院生であった高田勇道先生は、日本の立て直しは教育にあるとして倉庫を借りて授業を始めた。働いている者、学ぶ機会のなかった者を受け入れて自らが教鞭を取っていたそうである。創価学会の池田大作名誉会長も『人間革命』の中で、高田勇道先生の偉大さを称えていた。同じ境遇で当時の大世学院(富士短期大学の前身)で学んでいたそうである。早稲田の先生方の協力もあって、短期大学として認可されていた。

昭和40年代の日本の高度成長期には、中卒が「金の卵」として持て囃されていたが、夜間に学ぶ学生のために富士短大は大きく門戸を開いていた。私もこの恩恵に預ったことになる。中学も高校も出ていなかったが、富士短大を卒業すれば四年生の大学への編入学の道が開かれてくる。

富士短大によって人生の足場が築かれ、大きく前進する可能性が与えられたと言える。東京富士大学の二上理事長、歴代学長に会うたびに人生の出発点になったことの感謝を述べるようにしている。私の地を這うような生き方を、高田勇道先生の精神を地で行っていることで喜ばれる。

富士短大の良さは、諸先生方が実に丁寧で亡くなる直前まで年賀状で消息を知らせ励まして下さったことである。親からの援助がなく、働きながら学ぼうとする苦学生の心をよく存じていたものと思う。特に酒枝義旗先生は内村鑑三の弟子でもあり、無教会派であるにも拘らず、聖書の言葉で最期の亡くなる年まで励ましの手紙を下さったことは、絶望に近い苦しい状態の時には大きな励ましになった。また岩崎波治先生は、苦学生が家族的な雰囲気のある生活に飢えていることを承知していて、伊勢原市の自宅に泊り掛けで呼んで下さった。

これらの先生方のお陰で不安定な生活を送る者にとっては何かしら心強かった。先生方は、些細なことでも喜んで丁寧な返事下さり、本当に励みになった。富士の先生方のお蔭で、誰にも理解されず、寂しく一人で苦しみ、悩むようなことはなかったと思う。富士以降の他大学では、事務的になって何の返事も頂けない先生が大半であるから、親身にな

って見て下さる富士の先生の暖かさは際立っている。

私の人生は、富士をバックにして、何かしら目に見えない力に支えられてきた感じがしている。絶望に近い状態でも自分が生きていることが実感できる不思議な力が働いていたように思う。また、富士の良さは、半世紀以上経っても皆さんが昨日のここのように覚えて下さることでしょう。同じように働きながら学ぶ者が多かったこと、お互いに苦労が分ることから、励まし合い、慰め合うことが出来たと思う。

十分に学べなかった負い目は、定年後に大学院に進むことを目指します。現在は、時間が掛かり実入りの少ない（就職の可能性も少ないので）学生が取り組まない「比較思想」研究の道が続いています。東西世界の思想対立を克服して、邂逅の道を求めるものですから課題は山積しています。特に「宗教間対話」は一つの宗教の研究では済まないので幅が広く、取り組む学生が少ないのが現状です。大学院での新しい取り組みから希望の光が見え始め、ライフ・ワークとしての道を歩むようになっていきます。「比較思想」を語ると1年間の講義になりますので省略します。

この状態で、ただ一言で言えることは富士によって暗闇の道に明りが灯され開かれてきたと言うことです。年齢だけ進んでいても、中学も高校も出ていない訳ですから、取ってくれないと人生はそこで終りでした。本当に無に等しい者を引き上げて下さったのが富士でした。

富士で教わった先生方は、戦後の日本の貧しい時代をよく御存じのようでした。特に私などは、南米パラグアイで人類未踏のジャングル（原始林）を伐採しての開拓移住地に入植した移民の子どもでしたから、およそ人間としての（権利とか自由の）生き方とは程遠く、目の前のジャングルを伐採して切り開かない限り、畑が作れず作物を作ることができません。生きるためには子どもでも稼働力として容赦されませんでした。一日でも早く生活の糧が得られるように、家族の生活が安定し楽になれるようにと力の限りヘトヘトになるまで働くだけでした。

そんな開拓当初の苦しい中では、「学びたい・学校に行きたい」などは贅沢な望みでしかなく、口に出すことも出来ませんでした。同じ年頃の友と語り合った夢や希望は、年齢が進むに連れて一つまた一つと消えて行きます。

この悔しい思いだけが何時まで経っても消えることはありませんでした。誰を恨むのか、親たちは早朝から真っ暗になるまで家族のために働いています。誰が悪いのか、国の移民

政策が悪いと言っても「国は強制していない」として責任を取りません。「移民は棄民」でしかなかったようです。一度国外に出した者を思いやり、援助することはありませんでした。何故こんな状況にあるのか、その苦悩の持って行き場所のない口惜しさが移民問題と思います。

この目に見えない「口惜しさ」が、活力となって現在があると思っています。

(c) 上智大学から

名古屋の南山大学を経て上智大学へ進んだ。しかし、平坦な道を歩んだのではない。金もない、身寄りもない者にとっては風邪も引けない生活である。世話する者がなければ入院などはとんでもないことであった。その日の食事に有り付けられるか、働かない限りお金は得られない、授業料のために休暇中は、昼夜二つのアルバイトで深夜まで働き続けた。日々の生活に追われても授業だけは休まず、アルバイトに疲れて寝込んで、朝、目を覚まして生きていることに感謝するような生活であった。坐禅では苦痛を逃れようとするとさらに苦痛が増してくるが、開き直って苦痛を受け入れると不思議と苦痛は去って行く経験をした。脳科学では解明されているそうだが、実際の体験なしには語れないことであろう。風邪も引けない状況になると不思議とその通り風邪を引かなくなる。気が張るのか、健康に恵まれていたのか、大病をせずに無事に大学を卒業している。

一応、日本帰国の目的は果せたと言える。道元禅師も『正法眼蔵』『説心説性の巻』で、「道」を真剣に求めるようになると、もっと厳しい修行を、自らがさらに求めるようになることを言っているが、同じことを経験していたように思う。

しかし、大学を出ても、パラグアイに帰っても仕事の見通しが立たない。再度、原始林の生活に戻ることも考えたが、結局日本で職を探すことになった。無一文の生活には変りなく、他の人よりも数年遅れた学生では企業の就職口はなかった。また、石油危機で不景気になった社会では職種も限られ、東京では教員の採用も50倍という難関であった。やっと、大阪に職を得て結局この地で定年まで働くことになった。

教員として就職しても時限爆弾を抱えたような厳しい環境では、毎日の仕事をこなすことで精一杯で生活にゆとりはなく、定年を迎えるまで、ひたすらに家族のために働くだけであった。やっと自分を取り戻せた中で、人生を振り返ると、「学び」と言うことでは「空白」を感じていた。このことが立命館大学の大学院に行くことになる。

しかし、この上智大学で学んだことが、定年後に徐々に思い出されて来て、これが人生の指針となっていることに気付くようになる。デュモリン先生、門脇佳吉先生の目指した諸宗教間対話の道が、二十一世紀に求められるものであったことにやっと気付かされてきた。

4. 定年後に学んだこと

定年後の道は、生活や就職の心配がなくなり、何かのしがらみに捕らわれることなく、自由に「真理」を求め「本来の自己」を追求することが出来るようになった。内容は哲学的な話になってくるが、現在取り組んでいることになる。

(a) 末木文美士先生と出会いと目覚めさせられる一言

定年後の立命館大学大学院での修士論文「ペドロ・ゴメス著『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』に見る A・ヴァリニャーノの指針」(適応主義布教方針)を、国際日本文化研究センター(以後日文研と記す)の末木文美士先生の「宗教研究基礎論」の最初のゼミで披露した。「宗教間対話」が研究の中心テーマであったが、この論文中のキリシタン時代のヴァリニャーノ(1539～1606)の取った適応主義布教方針が、第二バチカン公会議(1962～65)で追認され「キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言」となった経緯を話し、「二十一世紀は宗教間対話の時代」になったことを強調した。

他大学院生も含むゼミ生からの質問は多かったが、書き上げたばかりの修士論文で内心は自信に溢れていた。末木先生は何も語らなかったが、ゼミが終り教室を片付けて出ようとした時ポツリと言われた。「この論文ではキリスト教の側からの宗教間対話でしかない、仏教者から見てメリットはありますか?」と、疑問を投げ掛けられた。まるで古代ギリシアの哲学者ソクラテスが「汝自身を知れ」と言ったように、何かを教えるのではなく「無知」に気付かせる「対話の方法」で、優しく弟子に語りかけるものと同じであった。鈍感な者なので末木先生の言葉が自分の身に浸み込んでくるのにしばらく時間が必要であった。

今考えると、学問として当然のことを聞かれただけなので末木先生は覚えていないかも知れないが、一方的な自信の空回りの愚かさに恥じ入らされ、赤面の至りであった。学問の基本さえ何も知らない愚かな自分に大変な「宿題」を負わされた感じであった。頭に描

いていた六章立ての博士論文構想は意味を成さず、みごとに崩れ去った。その時から研究分野の裾野・地平は数倍に広がってくるが、方針が定まらず年齢によって鈍くなってきた頭では付いて行けないところが多くなり、余分な時間ばかりが掛っている感がする。

「宗教間対話」を主要テーマにしながら、「対話」の基本となる相手のことを認め、受入れ、良い面も悪い面も含めて同じ土俵に、同じテーブルにつけることは入口でしかないことの認識に欠けていた。仏教のことを何も知らないのでは、玄関先も分からないで「対話」を語っていたことになる。

末木先生の一言によって目を覚まされ、自分の愚かさに気付かされ、反省させられ、手探りで一から始めることになった。

(b) 諸研究会への参加 禅文化研究所で学んだこと

昭和40年代は「禅ブーム」、「西田哲学ブーム」であった。肉体労働のアルバイトが日当千五百円の時に、西田の著作物は神田の古本屋で1冊五千円であった。また、上智大学では愛宮真備ラサール神父の接心会の案内があり、奥多摩の檜原村・秋川神冥窟まで出掛けたりしていた。

上智大学の「東洋宗教研究所」では毎年宗教間対話のシンポジウムが開かれ、デュモリン神父、門脇佳吉神父、リーゼンフーバー神父の活躍が目立った。特に門脇神父は、中野・鉄舟会の大森曹玄老師を訪ねていて、毎週3回昼休みに大学内のクルツール・ハイムの赤絨毯の部屋で坐禅会をやっていた。毎回、鉄舟会でやっていることの話があり、禅道場の様子が手に取るように分った。また、お寺での参禅会にも自由に参加できた。特に中野の曹洞宗のお寺では鈴木格禅老師が駒沢大学を終えてから立ち寄り、その都度提唱をされて行った。他に上智大学内では西田哲学研究会もあり、合宿もあって西田の著作に触れる機会も多かった。しかし、就職してからはすっかり頭から消えていた。

定年後になってなんとか自分と言うものを取り戻し、少しずつ過去を思い出すようになって始めて生半跣な、ほとんどがやり残してきたものばかりであったことに気付かされてきた。末木先生の「宿題」から「禅文化研究所」を訪ねるようになって、研究分野での諸問題にぶつかる度に解決策を求めて、「日本宗教学会」「東西宗教交流学会」「比較思想学会」「西田哲学会」「西谷啓治研究会」「宗教哲学会」等に加入するようになる。案内を受ける諸研究会にも時間が許す限り参加するようにしている。まだやっと研究会での話の内容に

付いて行けるようになってきた程度だが、素人であることに変わりはなく、多くの難問を抱えて彷徨っていることになる。ただ、不勉強であったが、この上智大学で学んだことが、禅文化研究所の西村恵信先生の話の伺いながら人生の指針となっていることに気付かされている。

(c) 対話の基本について

前項で末木先生の「一言」として「対話的原理」の不足について述べたが、ここではその「対話的原理」を抄述する。西田の論文「私と汝」が対話の基本であることを藤田正勝は『思想間の対話』（法政大学出版局 2015 年）で「私は汝を認めることによって私であり、汝は私を認めることによって汝である」とする。この「対話の基本」の大切さが十分に認識されていなかったことは、末木先生の指摘も同じで反省材料でもある。さらに藤田は「このように西田は自己と他者との本来的な関わりを、一方で他者に呼びかけるとともに、他方その呼びかけに応えるという相互的な行為の中に見出す」とする。すなわち、「対話」はお互いに「真の自己」を認め合うことによって、共通の領域へと歩み寄り架橋された時に成立する。

この当たり前のようなことが、東西霊性交流やアジジ世界宗教者平和の祈りの集いや比叡山宗教サミットなどはあっても、未だ一般信徒同志の中にはなく、「対話」そのものは遅々として進展していないことになる。キリスト教はもっと身近な生活の中にある宗教であるはずなのに、何故に溝を作り、垣根を作り、対話以前の交わりさえ避けて、他宗を別々の世界のように見てしまうきらいがあるのか？ 仏教においても同じであろう。「根源的のち（地下水脈）」を根底に据えるなら一休宗純禅師の道歌とされる「分け登る 麓の道は多けれど 同じ高嶺の 月を見るかな」に象徴されるように真理の道は一つであることの意味が生きてくる。同じことはユングの「集合的無意識」においても、唯識の「阿頼耶識」においても言われている。西田の「絶対無の場所」も「私と汝」における対話的原理において言わんとしたことは同じところにあると言える。

これまでの研究成果として、西田哲学を基軸とするなら東西の思想を包み込み「宗教間対話」の道は開けてくるものと見ていたが、「私と汝」の「対話」の基本となるもの、すなわち「キリスト教はどれだけ西田や仏教を理解出来ていたのか」、西田は何故「キリスト教は対象論理」としたのか大きな疑問となって残ってくる。お互いに他者として夫々の「個」

としての人格の良い面も悪い面も認め合って、初めて「対話」が成立するからである。この「対話的原理」を忘れなければ、将来への方向性を見誤ることはないと思う。

すでに見たように修士論文を書いている途上で、キリシタン時代のイエズス会日本巡察師・ヴァリニャーノの適応主義布教方針が第二バチカン公会議で 380 年の時を経て「宗教間対話」として重いバチカンの鉄の扉を抉じ開けさせたことから、この方面の道を模索するようになっていた。これまでのバチカン「教会の外に救いはない」として来ただけに宗教間対話は 180 度の方針転換になっていた。

ヴァリニャーノの「適応主義」と言うと、当時のヨーロッパではルネサンス・宗教改革と続き、ローマ・カトリック教会は危機的な状況にあり、16 世紀のトリエント公会議は護教的な方策から、厳しい教令を定めていたさ中、キリシタン時代の日本の教会で実施されていたもので教令違反が疑われていた。ヴァリニャーノは、まだ出来たばかりの日本のキリシタン教会を「プロテスタントもイスラムもない」のに、トリエント公会議の教令を当てはめる必要がないとして、日本人に最も合った方針を打ち立てた。同じヴァリニャーノの命を受けて中国に入ったマテオ・リッチ（1552～1610）も「適応主義」の同じ方針を取っている。中国では後に教令違反で訴えられ「典礼論争」に発展する。

当時のヨーロッパ絶対の考え方では、遅れた宣教地の民人に優れたヨーロッパの文化・宗教を教えに行くことが人類の救済になるとされていた。しかし、F・ザビエル（1506～52）の「日本報告」では日本人は「これまで遭った民族の中で最高」としていて、文化・道徳においてヨーロッパのどの民族よりも優れていたことでイエズス会の布教方針も大きく転換させられた。ヴァリニャーノは 30 年遅れて来日し、ザビエルの意向を忠実に実行したと言える。ヴァリニャーノは、日本のキリシタン教会に最も相応しい方法として「適応主義」を取ったが、トリエント公会議の教令に違反するのではと常に疑われる内容であった。

このことは既述の修士論文で扱っているが、こうした発想が出来るのは、開拓・移住の経験が基礎にあってのことと自認している。

5. おわりに

自分が生きてきた証しとなるもの、それが欠けている人生ほど不安なものはないと思う。

パラグアイに於ける開拓地での空白を埋めて余りあるものが寺田先生によるアルト・パラナ農業講習所であった。この寺田先生との出会いが日本に帰国して大学で学ぶ決心をさせてくれた。しかし、学齢期を原始林の中で過ごし、普通の学生が常識的に知っていることさえ無知であったことが、今日までも負い目として押し掛かってきていることも事実である。

これまでに既に見て来たことだが、不思議と自分の人生には必要な時に必要な助け手、先生が現れ、導かれていることの実感がある。何かしら行き詰まった時に階段を一段一段引き上げてくれる目に見えない力が働いているように感じている。このことが、残り少なくなった人生ではあるが、心に響く声に傾聴し、老骨に鞭打って答えて行かねばならないことを自覚させられる。

「宗教間対話」の道は、バチカンも教皇フランシスコの選出によって大きく変わろうとしている。二十一世紀は「宗教間対話」の時代であることは、宗教の危機的状況を見ればはっきりしている。現教皇フランシスコは、今も教皇に用意されたバチカン宮殿に住まず、外来者用の宿舎サンタ・マルタの家に住む。教皇専用のリムジンに乗らず、一般謁見に際してもサン・ピエトロ広場を普通車で回る。清貧のアシジの聖フランシスコ(1182 - 1226)に因んで、フランシスコの教皇名を選んだように、危機にある教会の改革と貧しい人々と共にある教会の姿勢を示している。伝統に固執し、保守的な官僚的なバチカン内部の改革に入ろうとしている。

「第二バチカン公会議の開かれた教会の精神を尊重する」ことを公言し、二十一世紀に相応しい諸宗教間対話も推進されることが期待されている。教皇は、決していま新しい改革をやろうとしているのではなく、既に「聖霊の働き」によって導かれた第二バチカン公会議で決定された諸憲章・教令が実施されて来なかったこと、やるべきことが成されて来なかったことへの反省から始めている。従って歴代の教皇の回勅や教令を引用しながら、保守的・官僚的なバチカン内部に警告を発している。2015年5月24日に出された回勅「ラウダート・シー Laudato si」はその延長線上にある。

この回勅は、イグナチオの『靈操』の精神が根底において生きているもので、西田哲学との類似性が捉えられることによって、大きく二十一世紀の宗教間対話の道・邂逅の道を開かれて来ている。将来に向けての教会のあるべき姿、「靈性」がはっきりと示されていると言える。

西田哲学の「絶対無の場所」を「かなめ石」とするなら、東西思想を超えた仏教にもキリスト教にも通底する思想が「根源的いのち」において見えてくるのではないか。「宗教間対話」に軸足を置いて、二十一世紀に開かれた道を探求するためには欠かせないものとなるであろう。

これらの文を書きながら、改めて自分のやるべきことが明確に見えて来たように感じている。

パラグアイの開拓地から、富士、上智と学んできた人生を振り返って、始めて自分のなすべき道が見えてくる。即ち、東西の思想間の対立、仏教とキリスト教の対立、この解決の道、邂逅の道は、それらを超えたところにある真理、現代の「コペルニクス的転回」が必要であることが見えてくる。

この数年程で、モヤモヤとして視界が見えなかった世界が、現代ヨーロッパの思想・言語から失われている「中動態」の文法に辿り着いた。インド・ヨーロッパ語の祖語、東西に分かれる前には「中動態」があったことが分かる。起死回生のヒントを与えられたように思う。

ヨーロッパの思想・言語、文化、宗教（キリスト教）は、「中動態」の文法が失われたギリシア哲学に基礎を置いていることが見えてくる。これでは東洋的思惟、特に日本の思想・言語は理解できないことになる。西田・西谷の京都学派の哲学などは曖昧論理としか見ていない。「中動態」の文法を入れることによって、容易に理解可能であることに気付いた。

これらの体験は、開拓地での生活経験があって異文化の中で暮らしていたことが大きく役立っていた。また、日本でも富士で学んだこと、ドン底の貧乏学生であったこと、最悪の状態において「開き直り」と言うか、見えない世界を捉えていた体験が何かしら新たなものを見出してくる。

富士に始まった学業が、「水と油の関係」の東西思想の対立、日本の仏教とキリスト教の対話等諸宗教間対話に大きく役立ち、新たな境地への道を開いてくれると確信できるようになった。自分の人生の軸足は不動のものとしてあると思えてくる。

現代西欧の言語・思惟方法は、主語・述語、主観・客観の論証を求める科学的な論理学が主であった。西洋の論理学・弁証法では、論理的に証明されたものが主となるため、「形なきものの形を見 聲なきものの声を聞く」ような西田哲学・東洋の思想は非論理的として排

除されてしまう。

以上によって、「中動態」を失ったがために西洋の言語・思惟方法では語れなくなったもの、表現出来ないものが何だったかも見えてくる。即ち、言葉や形に表さない限り真理とは認めない西洋の言語・思惟方法では、見えない「ところ」の世界は語れない。

しかし、真逆なまま東西思想の対立を放置することはできない。西洋のモノサシ（論理学）で見るなら欧米優位のままで、他は追随するものとされてしまうが、インド古典論理学で見るように、東洋的な「即非の論理」と対面し、結び合わされると「東西論理思想の総合」が達成されるのではないか。西田哲学では、このことを「絶対矛盾的自己同一」、「一即多多即一」論理で説明している。

木岡伸夫は、これまでの西洋のアリストテレスの論理学では答えられなくなっている現実世界を捉え、「ロゴスとレンマ」「アナログアの論理」「縁の結ぶ世界」から、新たな「邂逅の道」が見えてきたことを述べている。「中動態」の掘り起こしは東西思想の対立を超えた新たな「邂逅の道」を見出し得るであろう。まさに「あいだを開く」主題に近づく対話の原理の可能性がここに拓けてくる。ロヨラのイグナチオの「霊操の不偏心」から「邂逅の論理」を入れて、西田の「絶対無の場所」を合せられると東西を統合する「かなめ石」となり、二十一世紀に向けた「世界哲学」の道が開けて来ると確信できる。西田哲学を中心に「対話・邂逅」は今後の新しい課題となってくる。

今回は、自分の人生を振り返る良い機会を与えて下さり感謝しています。この原稿を書きながら、反省とともに進むべき道も教えられているように感じています。開拓移住体験は、何にも代えられない貴重な体験であったことを教えられています。

《筆者略歴》

高橋勝幸

■ 略歴：

1945年 愛媛県今治市生

1957年 家族と共にパラグアイ国移住

1966年 単身日本帰国

1969年 東京富士短期大学卒

1975年 上智大学文学部卒

2011年 立命館大学大学院文学研究科修了（修士）

2011年4月～2015年3月 総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻研究生

2015年4月～2019年3月 南山宗教文化研究所非常勤研究員

■ 職歴：

1963年 海外協会連合会パラグアイ支部(現 JICA)アルト・バラナ指導農場（試験場）就職

1966年 同農場（日本留学帰国のため）退職

1967年 (株)土屋製作所 就職

1968年 同社（学業専念のため）退職

1975年 （鎌倉）栄光学園中・高校臨時教員

1977年 （大阪）啓光学園中・高校就職

2008年 同校定年退職

■ 著書：

1. 『日本史小百科 キリシタン』H・チースリク監修，太田淑子編，東京堂出版，1999年．分担：「近畿のキリシタン」.
2. 『三好長慶』今谷明・天野忠幸監修，宮帯出版，2013年．分担：「三好長慶とキリシタン」.
3. 『比較思想から見た日本仏教』末木文美士編，山喜房佛書林，2015年．分担：「仏教とキリスト教の邂逅の道～キリシタン時代から続く対話の靈性も求めて」，503ページ.
4. 『映しと移ろい』花鳥社，2019年．分担：「宗教間対話の桎梏を超えて～〈中動態〉によって見えてきたもの」

■ 論文：

1. 「対話的原理について～西田哲学の場所論と祈りのあるキリスト教の類似性」（『宗教哲学論叢』，花園大学「宗教と哲学研究会」），第一輯，81～106ページ，2016年7月.
2. 「キリスト教は対象論理か」（『東西宗教研究』，東西宗教交流学会）第14-15号，207～231ページ，2016年8月.

3. 「ヴァリニャーノの適応主義の現代的意義」(電子ジャーナル『アジア・キリスト教・多元性』, 京都大学) 第 14 号, 2016 年.
4. 「中動態の文法から見えてくるもの～十字架の聖ヨハネの〈詩作〉から」(同上) 第 15 号, 2017 年.
5. 「21 世紀に開かれた邂逅の道～キリシタン時代の適応主義の先駆性」(同上) 第 16 号, 2018 年.
6. 「対話を超えて 邂逅の道は開かれた」(同上) 第 17 号, 2019 年.
7. 「21 世紀は宗教間対話の時代～カール・ラーナーの神学から～」(同上), 第 18 号, 2020 年.

■ 講演：

- 「富士こそ我が魂～富士に救われ引き上げられた人生～」第 68 回東京富士大学校友会定期総会講演会 [2017 年 6 月 17 日], [\(東京富士大学校友会誌『雄峰』第 56 号, 10～13 ページ \(2018/3/16\)\)](#)

《参考資料》

- 高橋勝幸「しばし感涙に浸る～資料室に写真展示～ルイス号で勇躍移住」(『O BRASIL』, 神戸日伯協会機関誌), 2 ページ, 2005 年 3 月 31 日.
- 「おばあさんに話したい～神戸の資料室 移住写真に感銘」(『O BRASIL』, 神戸日伯協会機関誌), 3 ページ, 2005 年 3 月 31 日.
- 高橋勝幸(私信掲載)「パラグアイに残してきた妹が 48 年ぶりの帰国 奥井会長へ思いつづる～大阪府家族会の高橋さん」『移住家族』第 428 号, 25 ページ, 2005 年 12 月.
- 「幻の楽譜が見つかる! パラグアイ開拓の歌 高知県大正町移民団長の遺品より」『移住家族』第 427 号, 24 ページ, 2005 年 2 月.



故郷の最後の夏 全員パラグアイへ(1957)
勝幸前列左から2人目



洋上の移民船ルイス号(1957年11月19日)



故郷今治小学校同級生との別れ
勝幸最前列中央(1957)



原生林入植初日朝食(1957年)



神戸移住斡旋所屋上(1957年11月17日)



入植直後の大正町(サンタローサ地区)の様子(1958年)



移民船ルイス号神戸出帆(1957年11月19日)



開拓当初の伐採・山焼き(1957年頃)



入植当初の野外炊事風景(1957年頃)



農業試験場職員スナップ写真



日系の協力でグレーダー購入(1960年)



海外協会連合会(現JICA)職員時代(1963～)



第一期講習生時代 アルト・パラナ(現ピラゴ市)



サンタロサ, フラム 勝幸右側(1965)



アルゼンチン国ミッシェネス州修学旅行
(アルト・バラナ農業講習)



第68回東京富士大校友会母校定期総会
講演会(2017年6月17日)